

【パネル1 12月7日 9:45-11:40 A会場 1F大講義室】

上座仏教社会における高齢者のウェルビーイングと宗教実践
女性高齢者の仏教実践とその多様性

速水 洋子
(京都大学・連携教員)

上座仏教社会において高齢者は功德をめぐる実践と不可分である。まず何より、人生の終わりに向けてより良い最期と来世を迎えるため、多くの俗人信徒は自身の功德の多寡を問い、宗教実践による積徳に専心する時期である。俗人による積徳行為としては、寺院・僧侶等への様々な形での布施、そして持戒行や瞑想、僧侶の説法を聞くことなどがある。これら自体に男女の相違はないが、仏日の寺院に持戒行などで集まるのは女性高齢者が圧倒的に多い。

東南アジア大陸部の上座仏教社会において女性の出家や比丘尼としての受戒は一般的ではないなかで、女性にとっての積徳は、主として家族との関係や日常的な俗人としての実践のなかで理解されてきた。しかし成年期は世俗のケアに没頭することを余儀なくされる多くの女性にとって、高齢期はそうした世俗の役割から解放されて仏教三昧の積徳の条件が整う時期でもある。子世代にとっては、親世代が高齢期に自由に積徳を実践し、より良い最期を迎えられるようにすることこそが、最上のケアによる報恩であるとされてきた。しかし、高齢化が進むタイを筆頭に、家族における世代間の関係性や役割は変化しており、これに伴い仏教実践のための環境や時間を確保することも自明ではなくなっている。また仏教実践の在り方も、夫々の仏教伝統を背景に、階層や教育歴、性別により変化を遂げてきた。そうしたなかで、実際に高齢女性はどの様に家族を中心とする世俗の社会関係を維持・変化させながら、積徳や学びを実践するのか。また、持戒や教学学習など、個人の高齢期における実践は、どの様な新たな関係性を創出するのか、在家と出家の差異に何をもたらすのか、そこにはどのような良き生・良き死が求められているのか。

本パネルではタイ、カンボジア、ミャンマーで女性の生活や宗教実践について長く研究してきた人類学者三名が、特に高齢女性による宗教実践とそこに見いだされる家族親族や他者との関係、人生の最期に向けたより良い生と死をどのように迎えようとしているかを報告する。それにより第一に、現在の社会状況のなかで、上座仏教社会の女性たちがそのライフサイクルの最期の高齢期を世俗の諸関係と折り合わせながらどの様に迎えているのか、そして第二に、それぞれの仏教伝統を背景に、女性による高齢期の積徳や仏教実践において、出家と在家の実践の相違や、死を迎えるまでの積徳行為がどのように現出しているかを明らかにする。

【パネル1 12月7日 9:45-11:40 A会場 1F大講義室】

ケアするメー・ニャイの持戒行

少子高齢化する東北タイ農村における高齢者の宗教実践

木曾 恵子

(宮城学院女子大学・研究員)

本発表では、少子高齢化がすすむ東北タイ農村において、孫の世話など家族のケアを担う高齢女性（メー・ニャイ）たちがどのように宗教実践と向き合い、そこに何を求めているのか、とくに寺院での持戒行に注目して考えてみたい。

上座仏教社会では、高齢期は生産活動や子育てから解放され、仏教実践に邁進する時期であると言われてきた。東北タイ農村では、とくに高齢女性が集合儀礼的な仏教行事だけでなく、僧侶への食施や仏日に寺院で一昼夜を過ごす持戒行などに勤しんでいる。その実践のあり方は、在家者として日常的に寺院と関わるのが少ない高齢男性の宗教実践とはまた違った様相を呈している。

しかし現在の東北タイ農村では、高齢期に入っても生産活動や子育てなど家族のケアから解放されない人びとが増えている。消費文化、現金経済が農村に浸透しつくすなかで、若者や子育て世代の多くはバンコク首都圏で就労し、十分な公的年金制度がない高齢者の生活を経済的に支えている。そうした勤労世代の代わりに、農村で孫の世話をする高齢者も少なくない。あるいは老老介護で、配偶者やキョウダイの世話を翻弄される者もある。勤労世代の経済力に期待できない世帯では、高齢者が兼業農家として忙しく働き続けている場合もある。心身共に健康であっても、仏教実践に専念する時間がないと嘆く高齢者が増えているのである。

忙しい日常のなかでも、仏教実践を簡単に手放そうとはせず、家族のケアをめぐる実践とやりくりしながら寺院に通う高齢女性たちがいる。とくに雨安居期の仏日に八戒を守り、寺院で僧侶と同じように読経に専念する1日を過ごす持戒行は、高齢女性の仏教実践の代表的なものである。出家できない女性にとって、家族の代表として参加する他の仏教実践とは異なり、持戒行は寺院で行う個人的な積徳行為でもある。また個人的な行為ではあるものの、高齢女性同士で互いに声をかけ合い、お互いの持戒行への参加を切望し合う姿も頻繁に目にする。

そこで本発表では、東北タイ農村の高齢女性たちが主体的に行う仏教実践、とくに持戒行を彼女たちのウェルビーイングのひとつとして捉え、日常のなかでどのようにやりくりしながら実践し、そこに何を求めているのかを考えていきたい。より良い来世の祈願や人生終盤の積徳行為として捉えられる高齢期の仏教実践であるが、それを踏まえたうえで、女性の個人的な積徳行為の共同性という側面にも目を向けていく。本発表で扱うデータは、2004年以降、報告者が東北タイ農村において断続的に行った民族誌的フィールド調査によって収集した一次資料、および2022年8月、2023年8月の調査に基づく一次資料によるものである。

【パネル1 12月7日 9:45-11:40 A会場 1F大講義室】

生きている限り続けたい教学

カンボジア高齢者仏教徒のもう一つの実践

高橋 美和
(実践女子大学)

本発表では、カンボジアにおける、教学を学ぶ高齢在家仏教徒の出現について報告し、そのことが示唆することを考察する。

在家仏教徒が理想とする宗教実践は、出家者およびサンガを支えるという行為を通じて、一生の間にできるだけ多くの功德を積み、よりよい来世にそなえることである。特に、生業や家族生活での責任から解放された高齢期は、そうした実践に時間とエネルギーを割くことが可能となる。また、高齢者の実践によって、仏教徒コミュニティが維持されているという点も重要である。仏教の断絶を経験したカンボジアにおいて、1990年代以降の本格的な仏教復興は、寺院の再建に奔走し、年中行事を復活させた高齢在家者の存在によるところが大きい。

高齢者を中軸とする在家は、①仏教年中行事に寄進者として参加、②儀礼祭司として伝統・慣習の維持、③寺院委員会委員として寺院の食・財務の管理、のいずれか、もしくはいくつかの役割を果たす。さらに、一部の寺院には④俗人修行者として寺院に止住する人々（高齢女性が多く、ドーンチーと呼ばれる）もいるが、いずれの実践も積徳（功德を積む）の文脈で解釈できる。

これらに加え、仏教教学に勤しむ高齢者が2000年代より見いだせるようになってきた。1990年代より国民的人気を誇る俗人説法家ブット・サヴォンに感化され、比較的若くして修行者になった2人のドーンチーがいる。彼女らは1990年代にタイに渡り、バンコクのアビダンマ（Abhidhamma＝論蔵）学校で学び、全課程を修めた後、帰国し、プノンペンおよび近郊州の複数の寺院に拠点を移しながら、アビダンマを講じ始めた。法話ではなく、講義である。生徒は、一般の在家者（女性が圧倒的に多い）、ドーンチー、そして出家者である。コロナ禍で一旦教室は閉じられたが、現在はネットのライブ配信・録画配信で、学習会は続いている。

カンボジアでは従来、教学、つまり三蔵の学習をするのは出家者のみであった。全国民に開かれている仏教教育課程も、実際に履修するのはほとんどが出家者である。在家者は出家者による教学の解説をテレビやラジオの番組で聞くことはあっても、自ら学ぶことは稀であった。

一般在家による教学学習は、功德の文脈で語られる実践とは別のあらたな局面をもたらしている。世俗的な利益に結び付かない教学学習を「生きている限り続けたい」と述べる高齢者の出現、とりわけ、文字を介した学習に親和性の薄かった女性たちが積極的に取り組む姿は、在家仏教徒像とともに出家-在家関係に再考を迫るものといえる。

【パネル1 12月7日 9:45-11:40 A会場 1F大講義室】

死の不確実性をめぐる宗教実践
ミャンマーの事例から

飯國 有佳子
(大東文化大学)

櫻井は、主観的な幸福感(happiness)を支える社会的条件を含むものとしてウェルビーイングを措定し、宗教および道徳的規準から導かれる究極的なしあわせ(覚醒awakingもしくは救済salvation)は、これら幸福感やウェルビーイングとは異なるものとする(櫻井2019)。

上座仏教社会における人々のウェルビーイングを考える際、ミャンマーの現状を鑑みると、政治経済的状况が生活環境や生活満足度に及ぼす影響がいかに甚大かは言を俟たない。しかし、積徳行為や功德の転送からもわかるように、上座仏教社会における人々のウェルビーイングは、こうした此岸的な要因だけでなく、常に究極的なしあわせ(救済)を念頭に置きながら、現世のみならず過去や未来といった時間軸を意識し、精霊や死者など目に見えない存在をも包含する様々な他者との関係性のなかで構築されるものといえる。ミャンマーでしばしば聞かれる「50歳を超えたら宗教実践に専心すべし」という社会規範も、残り時間を逆算して、現世よりもむしろ来世におけるウェルビーイングの礎を築くことを推奨することから、宗教実践は特に高齢者のウェルビーイングにおいて、かなり重要な部分を占めるといえる。

しかし、いかに来世に向けて万全の準備を整えようとも、死という出来事は来世のウェルビーイングを阻む最大の不確定要素となる。なぜなら、どれほど高い徳を積もうとも、死の瞬間に雑念や邪念が浮かんだり、肉体的苦痛に氣を取られると、積んだ徳は無駄にはならないものの、来世のあり方は死の瞬間の意識に引きずられてしまうとされるためである。

そこで本発表では、より良い来世の達成に際して不確実性をもたらす死をめぐり、どのような対処を人々が行っているのかに焦点を当てる。まず、ミャンマー上座部仏教徒社会において、人々がいかに死の瞬間を重視し、それをよりよいものにしようとしているのかを簡単に述べた上で、2人の高齢女性の宗教実践の事例を、死という軸から考えていく。